



機関紙

一水会

No.9
『冬号』

発行日/2017年12月1日

発行人/小川 游

編集責任者/さきやあきら

発行/一水会事務局

〒192-0364

東京都八王子市

南大沢2-224-3-502

玉虫良次方

Tel.042(674)6922

http://www.issuikai.org/

題字/有島 生馬

巻頭言 久保田辰男



一水会展は本年79回展を迎えた。今回の一水会展でまず最初に触れておきたいのが、念願のロビー階全棟使用が実現したことである。山本耕造先生を中心に鋭意、真摯に交渉にあたられた結果であり、心よりお礼を申し上げる次第である。さて、79回展の顕著な特徴は初入選は63名、中作品(50、60号)の入選増があげられる。審査においてはサイズの大小を問わず同等の観点で進行したことは明記したい。

また、一棟増で新たな会場のレイアウトでは二段掛けはあるものの1〜20室まで、中味の濃い展示となった。さらに新事務局長玉虫良次先生提案のA4サイズの図録は好評で特筆すべきことであり、配布の方法も一新された。来年9月には記念すべき80回展を迎えることになる。企画展としては一水会展を背負ってきた往年の先生方の作品の特別展示を予定している。私たちは温

故知新の好機と捉え、今後の制作の糧にしたいところである。80回記念展にあたっては、大きな節目との認識のもとに、改めて作画の意図、必然性を自問し、オリジナリティ溢れる作品の具現化に挑戦しようではありませんか。



久保田辰男 画

昭和11年具象を旗印に発足した一水会は80回展を迎えようとしています。戦に敗れ廃墟の中から立ち上がって現在に至っているわけですが、これは創立会員の先生方をはじめ先輩の先生方の御力だと云えましょう。希望を失った人々に日本の美しさを、無気力になった人々に勇気を与えた昭和20年代の一水会は素晴らしかった。今はどうでしょうか。昭和30年代に入って、ヨーロッパをはじめアメリカ等で起った抽象画や、その他の美術運動に押されて、具象を目的とする一水会は古くさい会という人さえ出て来ました。これは軽率な考えで、具象は少しも古くはあり

今思うこと

寺井力三郎



ません。具象も抽象もそれぞれの個性であって、自由な表現方法なのです。どうか皆さん自信をもって自由な具象画を描いて下さい。ただ、今の一水会は無難な作品が多すぎると思います。入選を意識しすぎるのでし

ようか。人はそれぞれ顔が違ふ様に、考えも感覚も違ふはず。自分は自分です。もつと個性のある画を描いて下さい。こげおどしではなく、自分の心の中から自然に湧いてくるものが多いのです。ずい分と御説



教めいた事を書いてしまいました。御許し下さい。私は今80回展に向けて裸婦を描いております。尊敬する安井曾太郎先生は多くの裸婦の作品を残されました。80回展には僕も初心に帰って裸婦を出品しようと思っております。一水会をなぞる様に、ぼくも87歳となりま

きました。あと何年生きられるかわかりませんが、出来るだけの事をしていと思っております。

特集 第79回一水会展

展 評



池田 清明

どが上手く決まり、その上で、描き手の描写力がこの絵を魅力的なものにしている。一水会のオーソドックスな伝統を思わせる絵である。

一水会の審査に出るようになって何年になるだろう。最近審査にコンピューターが入り、絵が登場するとタイトルと共に作者の年齢が揭示される。出品者の高齢化に驚くがそれと闘うように作品は若々しい。また新入選の新鮮な絵も加わり今年も充実した作品が揃った。そんな中で印象に残った絵を受賞作の中から選んでみた。

「雲流れ行く」正田武(会員佳作賞) 雲が行き、鳥が飛ぶ雄大な自然の様を美しい色彩と生き生きとしたタッチで歯切れよく表現している。目に心地よい風景画である。

「梧桐のある室内」城真知子(佳作賞) この絵の作者は室内をテーマに連作している。平凡にも見える絵だが毎回見せ方に工夫があり驚きがある。緑の葉、鏡、ガラステーブル、色面構成と配色が美しい。

「母」穏やかな日々」中山孝美(山下奨励賞) 縁側でくつろぐ母へ、作者の優しい眼差しを感じる。顔、手、足の自然な表情がよい。人物を小さく描き、周りの空間を広くとることで、人物の存在が一層強くなっている。

「アトリエの午後」後藤邦夫(有島奨励賞) 絵画教室での作品だろうか。人物を背後から描いているがモデルの目線まで描けている。モデルを前に描いた臨場感が強いタッチから伝わってくる。

「葡萄の朝」藤原加奈子(新人賞) 葡萄棚の一部を横長の画面に上手く配し、良い構図にしている。画面を横切る棚とそれを支える支柱、自由にのびる蔓や葉、その動きが美しい。

「曇りのち晴れ」分部久美子(安井奨励賞) ミシンのある部屋に清らかな光が差している。一見モノトーンのような色を抑えた画面であるがミシン、床、

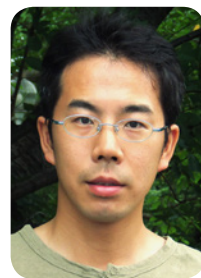
「紺青色のドレス」岡田早苗(木下孝則奨励賞) 人物の衣装、ポーズ、ソファやクッションの取り合わせな

「蓼科の夏」池田 清明



蓼科の夏 池田 清明

新会員紹介



伊藤 尚尋さん (大阪)



田中 久美子さん (神奈川)

を決めて描くようになっています。こんなに早く会員になれたことは、夢のようです。

会員推挙、光栄です。お陰様で様々な展示にお声かけ頂き、それに伴って国内外様々なところに赴き取材させて頂いています。

日々感動の毎日、その感動が制作の原動力となっています。常に複数枚の作品を制作していきながら、次描きたい感動が列をつくつていて幸せな毎日です。

このたびは会員推挙を頂き誠にありがとうございます。鍵主恭夫先生に師事し、本格的に絵の勉強を始めて十五年。「休息」をテーマに人々の日常生活を描いてまいりました。これからも諸先生方が築いてこられた歴史と伝統ある一水会の名に恥じぬよう努力してまいります。



大野 文子さん (埼玉)

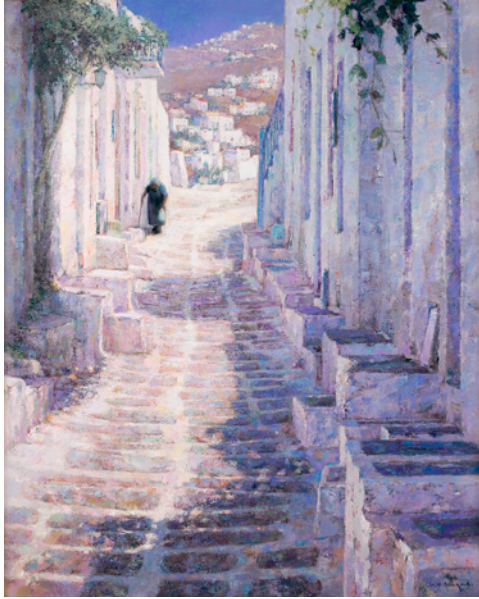


中山 一昭さん (石川)

育児が少し落ち着いた頃、週一回のお稽古から県展を目ざして描き始めました。埼玉県展は全国でもトップクラスで入落どころかと、とてもスリルがあり楽しみでした。私は静物画ですが部屋の中を意識し、ポイント

若き頃から、いろいろな絵画展を見てきて、いつも寛げるのは一水会の方々の作品でした。当然のように自分もそんな魅力ある絵を求めて描いてきました。これからも何気なく見ている光景を自分なりに追及していき

若き頃から、いろいろな絵画展を見てきて、いつも寛げるのは一水会の方々の作品でした。当然のように自分もそんな魅力ある絵を求めて描いてきました。これからも何気なく見ている光景を自分なりに追及していき



一水会優賞
ミコノスの小径 長坂 千恵



文部科学大臣賞
御嶽の麓 一の瀬 洋

この度は、会員推挙いただき有難うございます。絵を本格的に取り組んだのは、「よっかいち素描の会」に入会してからです。デッサン力を身につけ、田島健次先生の絵画のお話など基礎的な事を多く学んできました。これからも、沖縄文化を肌と感じ、愚直に、泥臭く挑戦していきます。



山崎 保さん
(三重)

娘をモデルに発表しています。娘の成長とともに、思いや願ひ、不安や迷いといった内面的な表現もできればと制作しています。そのような中、長時間モデルに協力してくれる娘にはいつも感謝です。今後も魅力ある作品が発表できるよう精進してまいりたいと思います。



広川 明人さん
(新潟)

いと考えています。今後共よろしくお願い致します。

真冬の木曾開田村は本当に寒く、朝四時頃に宿を出て、現地での描画は二十分も持ちません。それでも、夜が明ける前の高原は神秘的で不思議な美しさです。同じ場所に四十年通っていますと、村の人達に無理を聞いて助けてもらえます。その総合的な



一の瀬 洋さん
(神奈川)

文部科学大臣賞

受賞のことば

「埼玉の自然を描く」をテーマに、武蔵野の田園風景を中心に長年描き続けてまいりました。自然と向き合っていると季節や時間の変化によって、いつもの風景がとても感動的に見えることがあります。その感動を素直にキャンバスに残そうと日々奮闘しています。



吉田 穂重さん
(埼玉)

犬が見せる一瞬の仕草と、そこに流れる時間や空気感を描きたく、表現したい思いを筆に乗せ、今回も色を重ねました。継続は力なりと言いますが、少しは上達しているのでしょうか。これからも日々精進いたします。この度は、素晴らしい賞を授けて頂き、誠に有り難うございました。



宮崎 貴至さん
(奈良)

一水会賞

この度は、名誉ある賞をいただきまして、ありがとうございます。南ヨーロッパの風景が好きで、長く描いてきました。最近では構図、色彩についてより深く考えた作品づくりを目指しています。今回の受賞を励みに、より一層精進してまいります。



長坂 千恵さん
(愛知)

一水会優賞

写生が今回の作となりました。



うたた寝 齊藤 蕙子



峠の春・知床 小川 游



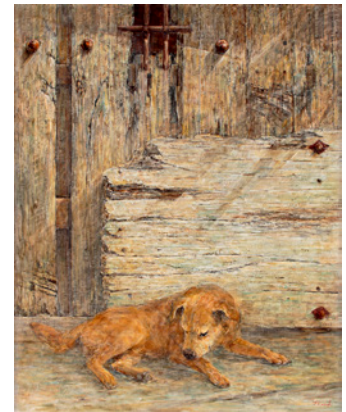
月華 吉崎 道治



初秋の石鎚山 越智 節昇



損保ジャパン日本興亜美術財団賞
春の公園 島山 正枝



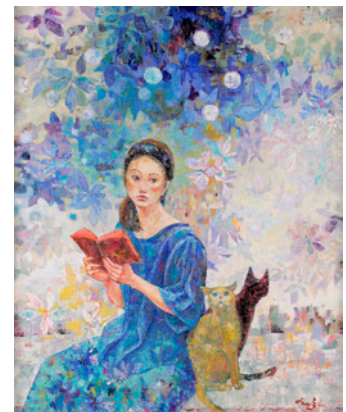
一水会賞
穏やかな午後 宮崎 貴至



谷戸光彩 小沼 秀夫



夏のアトリエ 山本 佳子



星詠み 相馬 順子



塔・盛岡 服部 三郎



安井曾太郎奨励賞
曇りのち晴れ 分部 久美子



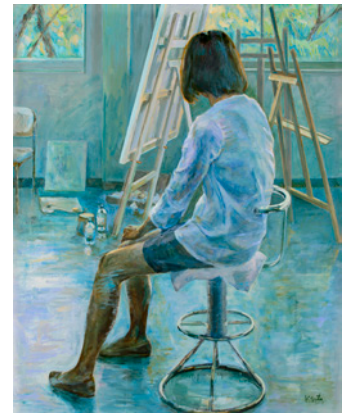
早春只見川(塩沢) 酒井 昌之



新人賞
葡萄の朝 藤原 加奈子



東京都知事賞
足音 宮島 百合子



有島生馬奨励賞
アトリエの午後 後藤 邦夫



ヒマワリ 市川 広美



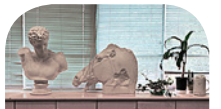
一般佳作賞
月と変電所 山口 武行



裕伊之助奨励賞
私のアトリエ 海部 洋

- ◎委員 推挙
土田佳代子 (以上一名)
- ◎会員 推挙
伊藤 尚尋、大野 文子、田中久実子、中山 一昭、広川 明人
山崎 保、吉田 穂重 (以上七名)
- ◎会友 推挙
浅井美智子、葦名 京子、阿部 徹江、池田 貴子、石原 久子
乾 邦子、大場 要、岡 愛子、岡田 省吾、奥田 まり
城戸 一衛、木根内美樹、佐原 猛、塩澤 秀雄、渋谷 美美子
須田 成子、竹野 雅生、谷本美津子、田村 武弘、知原千代子
込元 喜雄、津矢田 豊子、戸田 哲雄、戸田 増久、中尾知花子
中田 基宏、中村 洋市、南雲 和夫、平野 重樹、福井 玲子
福永 貴子、藤正 晶延、村上 晴子、前野 恒子、松林 重宗
松吉千代子、宮崎 晶夫、村前 茂、山崎 享子 (以上四十二名)

- ◎入賞者
- ◎文部科学大臣賞 一の瀬 洋 (神奈川)
- ◎一水会 優賞 長坂 千恵 (愛知)
- ◎会員 佳作賞 加賀雅英子 (神奈川)
- ◎準会員賞 (会員推挙) 正田 武 (石川)
- ◎一水会 賞 加地 求 (石川)
- ◎東京都知事賞 武田 道弘 (奈良)
- ◎宮崎 貴至 (奈良)
- ◎宮島百合子 (東京)
- ◎損保ジャパン日本興亜美術財団賞 島山 正枝 (広島)
- ◎奨励賞 安井曾太郎奨励賞 分部久美子 (長野)
- ◎石井柏亭奨励賞 山口 順子 (石川)
- ◎山下新太郎奨励賞 中山 孝美 (群馬)
- ◎有島生馬奨励賞 後藤 邦夫 (三重)
- ◎木下孝則奨励賞 岡田 早苗 (大阪)
- ◎小伊之助奨励賞 海部 洋 (大阪)
- ◎山下義謙奨励賞 金井美智子 (長野)
- ◎池田 繁雄 (愛知)
- ◎新日 池田 賢子 (埼玉)
- ◎一般 永谷 光隆 (静岡)
- ◎新日 新 泰郎 (石川)
- ◎池田 愛子 (埼玉)
- ◎熊谷 弥生 (埼玉)
- ◎城 眞知子 (埼玉)
- ◎中田 基宏 (石川)
- ◎松浦 久徳 (石川)
- ◎山本 正憲 (兵庫)
- ◎岩木 秀雄 (埼玉)
- ◎川尻 澄江 (千葉)
- ◎功野 智恵子 (広島)
- ◎田村 公男 (三重)
- ◎間瀬 徹 (愛知)
- ◎山口 武行 (埼玉)
- ◎藤原加奈子 (岡山)
- ◎菅沼 正則 (愛知)
- ◎小泉 玲子 (奈良)
- ◎山本 佳子 (岡山)



「白の会」は三十周年 絵画サークル紹介①

埼玉県蕨市の一水会アトリエで活動している「白の会」をご紹介します。この会は、一九八五年、埼玉県立近代美術館での小川游先生の「人物を油絵で描く」という講座受講生が母体となり誕生しました。二〇一四年四月には、さいたま市の公民館から、廃校になった中学



「第30回白の会展」にて



モデルを囲んで

校の教室である現在の一水会アトリエに移り、今年の七月には「第30回白の会展」が埼玉県立近代美術館で開かれました。最終日の小川先生の講評会では来場の方々も熱心に聞き入っていました。蕨市には戦後、『蕨画塾』があり、寺井力三郎先生、吉崎道治先生も通っておられたそうです。「白の会」のメンバーは創立当初は他団体の方もいましたが、現在は一水会

関係の十五名。構成は委員五名、会員三名、会友四名、一般三名。一水会展や県展の審査員などを務めている方もいます。人物画に限定してプロのモデルを使い、中品程度の作品を、六回、または九回で仕上げるという月三回の勉強会



小川先生による作品の講評

です。一水会会員の小笠原あい子さんから寄付して頂いたイーゼルも利用して、一水会アトリエを有効に活用しています。創立時から参加の金子朝子さん(会友)の話では、小川先生は月一回の指導日を三十年間お休みにならず、ご指導を続けてくださっているそうです。

(西真里子記)



「白の会」メンバー

※地域で活動しているサークルを紹介いたしますので、広報部まで記事をお寄せください。

第3回 一水会北海道出品者展

会期 / 2017年4月11日~16日
会場 / 釧路市生涯学習センター

広い北海道を巡回するよう、第1回の札幌、翌年の北見に続き、今年は釧路での開催となりました。会場確保に奔走された高橋康夫先生(釧路)が、この展覧会を見ることなく二月に急逝され、一同驚きと哀しみに暮れました。ご遺族や地方の方々のご協力で、昨年の受賞作などの他、遺作小品コーナーを設けて頂きました。四月とは言え、まだ肌寒い釧路の地ですが来館者は引きも切らず、連



風を追いかけて— 重石 晃子 展

2017年4月22日～6月4日
岩手町立 石神の丘美術館
岩手県岩手町



春雪 S100 2009年



夕暮れのトゥール F100 1977年
萬鉄五郎記念美術館 蔵



重石 晃子 先生

1975年、「日本からも絵からも離れたくて」渡仏。ところが、「行ってみたら何とも綺麗だね、あちこちが。やめたつもりが描いているんだ、いつの間にか、自然に描く力を得られて3年後に帰国。今回の個展は、滞仏作を含む総数34点うち油彩100号26点」による展覧。会場の要所に添えられたエッセイは観る人の心に触れて、「絵の道」が鮮やかに力強く語られました。
(新井隆記)

風景をドラマチックに見せるのは、
確かに風の仕業に違いない。
風は木々の梢をわたり、
太陽の光を細かく砕いて
キラキラとした葉っぱをそよがせる。
風は立派な芸術家、人智を超えた造形家である。
時に荒々しく、時には極めてデリケートな神の手だ。
見えない風に私は憧れる。
絵を描き続けたのは、風を追いかけてのこと。
「絵の中に風を描きたい」。
制作する時の私の命題である。
風景がテーマの時は勿論、静物でも人物でも、
画面の中に微かにでも風の流れが感じられれば
絵は生きると信じているからである。

重石 晃子



高原の風 F100 1989年



日盛況でした。会場も明るくモダンで、本当に良い展覧会になりました。
最終日には、中札内美術村へ来ておられた小川游生が、遠路車で駆けつけてくださり、ひとつひとつの作品に暖かいアドバイスを頂きました。一同、秋の本展に向け決意を新たにしました次第です。(勝谷明男記)

座談会 第2弾

2017年3月15日
日本橋三越 特別食堂

一水会、さあ…… 元気に羽ばたこう！

- 参加者
小川 游
寺井 力三郎
吉崎 道治
辰巳 文一
田島 健次
山本 勇
- 司会
さきやあきら
新井 隆
- 撮影・録音
西 真里子
加曾利光男

さきや 今日は一水会を代表する

先生方からこの会に望むことなどをお伺いし、出品者の方々に励ましのメッセージを頂きたいと思えます。出来るだけ具体的なお話を進めましょう。

例えば、制作にあたって写真を使う方が多いようですので、写真を使うことについてのお考えなどから始めてもよいかと思います。ぼくたちは当然ながら写真を表現手段として創作、発表しているわけではないので、そのような立場からのご意見を……

吉崎 今写真使う人多いでしょう！だから、使い方だと思っんです。写真そのものを描いてしまつて、面白くない絵にしている人が一水会に多いと思う。

僕は写真を使うのはもともと賛成じゃなかったんです。六十代まで100号も現場で描いていまし

た。今でも現場で写生して、その詩情をとつてくる。

これは大事だと思っんだよね。それから写真を撮るならば、露出



吉崎 道治 先生

を変えてオーバーとアンダーと標準とを撮るべきだ。使つてもいいけども、ならば撮る時も最初から

アングルも考えて。それから、色は写真の色だけを使つちやダメ。やつぱり自分で考えて、一枚描いてくれれば、写真と違う色が見えて

くると思っよ。そこに思いを込めて描いて欲しいなと思っ。写真をそつくりにつすから余分なもの

も描くんだよ。ぷらつとといった旅行の中から、これおもしろえやつて調子だつたらやめた方がいい。

寺井 僕はねえ、写真を使わざるを得ない。機関車を描くでしょ、

車を描くでしょ、飛行機を描くでしょ、細かいとこわかんなくなつちやうんだよ、撮つとかなない。

だから、写真はかなり撮ります。**小川** 今ね、写真は使つてもいいよなんて言わなくても使うに決まつてる。おとなしいな！今、絵が。

僕が一水会出した頃は、バラエティがあつたしね、自分の世界で思いつきり暴れてる人がいたよ。今もっと、暴れていいんじゃないかと思っね。

吉崎 昔の人はモノ見て描いて、モノから何かとつてたよ。今の人は写真からとるんだよ。だからね、強く出てこないんだよ。この間、真下慶治さんのカレンダーもらつ

たけど、いい絵描いてるよね。そういう詩情みたいなもの、もうちよつと考えてくれたらと思っな。

さきや コーヒーが入りましたからどうぞ。小川先生、お話が始まつたところですが、ここで先生の初出品の頃のお話を聞かせて頂けませんか？

小川 僕は一水会に出したのはそんな大昔じゃない、昭和四十三年(第30回展)が初出品なんですよ。

それまではね、七、八年、二科会に出してたんですよ。高田誠先生が僕のお師匠さんでね、「他流試合



小川 游 先生

やつてこい、僕に教つた事だけじゃなくて、いろんな奴に揉まれてこい。」つて言われたのをよく覚えてる。当時は人物の入つた心象風景出してた。小林哲ちゃん(小林哲夫先生)なんかは、僕が人物入れなくなると、「小川君あれが出てこないと寂しいなあ」なんて言われたもんです。だけど、いろんなものを省いても、何か気配のあるものが本物だろうと思っようになってね、だんだん変わつてきました。

「一水会に出すからつて、一水会風の絵にしようと思つたらだめだぞ！」つて高田先生からよく言われた。偉い先生ですよ。励ましてくれたんでしょね。

吉崎 一水会のポスターすつ飛ばすような絵(「遙」小川游作)描いてたね。僕は琢二先生の絵が好きで入つて、安井先生もいらしたしね。僕

たちの頃は最初30号ですからね。ちよつと面白いなと思うと二点入つて、上下に二点並べて貰くれたり…。

画風のことは何も先生おつしやらなかった。ある時ね、余呉の絵だったけれども、それを描いてきたら琢二先生が、「あつ自分の絵が出来たね」って。

新井 そのころ一水会についてはどのような印象をお持ちだったんでしょうか？

吉崎 詩情のある会だなって。

ただ一水会の特徴ってのはさあ、自然を大事にして、作つても、自然な形に仕上がつてると思ふんです。それが好きだよ。今はちよつと作つた絵が多いよな。

寺井 僕はこさえた絵を出すけど、写生した絵があるわけ。写生了した絵は他人に見せてもちよつとも恥ずかしくない。

だけど、一水会に出した絵は、どこか恥ずかしい。何だか自信が持てない。

吉崎 僕は写生と制作とは違ふとおもうんだよ。そこところを間違えないように。吉野谷君が写生に行くとき八ミリ動かして。吉崎君、八ミリまわしてるとね、アトリエで絵を描くときに小鳥の声か聞こえるだろ！川の流りが聞こえるだろ！その時の状況思ひ出すん

だよ」って。それ大事だと思うよ。

今の人に言いたいのはね、賞なんかどうでもいいじゃないの。賞金くれるわけじゃないし、僕は15回か16回展から出してんだけどね、賞金ももらったことないもんな！一水会から。

新井 見つめられても困るんですけど。(新井氏は初出品で受賞、副賞百万円ゲットしている)

吉崎 だからね、賞のことなんて考えない。審査員に眼がなかったんだよつてよく言うんだけど。自分の好きな絵を描いてくれりゃいいと思うんだよな。



寺井 力三郎 先生

寺井 私はね、一水会で今こうやつていられるのは川村さんのおかげなんです。あのころ僕は絵がわかんなくてね！一水会なんてのは古臭い会だなんて思ひこんじゃつてさ！でも、川村さんとよく写生行つてるうちにね、俺も具象写生の方が合っているんじゃないかなあつて思ひだして…そのころ小松崎君が近くに越してきたので、

川村さんと一緒になつて一水会出せて…出したら二点入っちゃたんだよ。僕の絵なんか良くしてくれましたよ、本当に有り難い。

一水会出して、やつぱり絵つていのは会場でみんなの絵と比べてみないと自分の絵の力、分かんないと思ひましたね。

吉崎 自分の絵、他の人の絵の中に並べると良いところも悪いところもわかるだろ。

寺井 分かるんだよ。

吉崎 それが分かつて欲しいんだよな。先生から習うよりずつと。先生要らずだつて言うんだ僕は。公募展良い所だ。

寺井 高田先生がね！どうだ俺の絵はつていのはダメだつて。ああしまった。この次はここ直さなきゃつて、こういうのがいいんだつて。

最近川口でデッサン教室やつてるでしょ。あれ、僕はがつかりした！もう少し巧いと思つた、一水会の人。デッサン出来てないわ！写真の模写ではなくて自分の眼で見ると訓練をしないと…

小川 風景はまあまあに見えても、人物描くと描けないという人はいっぱいいる。裸婦がちゃんと描けりゃなんでも描ける。

寺井 喋りついでに言つちゃうとね、一水会、勉強不足！

自分の周囲しか見てない。世界でいい絵描いてる人いっぱいいますよ。本屋の洋書売り場に行くとな、若くてもいい絵描いてる人がいて、そういう人の絵も勉強したほうがいいなあ！

一水会ね、同じようなモチーフが多すぎるよ！これを追及してんだつて言われたらしようがないけどさ。良いモチーフつてのは構図と関係してるから、違う角度で描けばもつといいのが出来るはずなんだよ。

小川 それから僕が気になつてしようがないのはね、他人がやつと掴んだ結果をすぐ貰っちゃう人。これはねえひとがやつと見つけて、それで貰取つたりすると翌年、やたらに似てる絵が出る。どつちが本人だつて言いたくなるね。本家本元がいい迷惑だ。

吉崎 柳の下のドジョウ狙つてる絵が多すぎるよ。



辰巳 文一 先生

辰巳 あの、僕が昭和十八年に奈良師範学校へ入つた時の美術の先生

が、一水会好きだったんです。そして大阪市立美術館で初めて東京から一水会の作品がやつて来た時に、その先生から、その当時の一水会重鎮の先生の話をしてもらつたことがあります。

初入選のときの懇親会で安井曾太郎先生が自然をながしるにしたらいかんぞという話をされたんです。それがいまでも頭に残つてるんですけどね。

初めはうちの祖母とかね、子供とか描いてました。そのあと黛元をしばらく描いて、それから今のようなかたちになつていったわけです。

僕は20号くらいのキャンバス持つていつて描きたい場所を描く、それを100号に引き伸ばす。この頃はそういうやり方です。

新井 海外の取材も現場でイーゼルをたててスケッチをされる。

辰巳 そうそう。道具持つていつてね、やりましたよ。

さきや モチーフの話になりましたけど、山本先生や田島先生のところではそれぞれの地域独特のモチーフなどおありかと思ひますが、如何でしょうか？

田島 いや、中部には、あまりそれがありませんよ。私は25回展から出してるんですけどね。有島生馬先生が、亡くなられる二年くら

い前に中部一水会展に来られて、誰を中部一水会賞にしようかという時に、私の絵に向かって「これがいいね、こんな墓場の絵、売れそうもない絵を描いて」って…一水会ってそういう絵の見方をされるトップの方がいるんだなと強い印象を受けました。

小川 安井先生の滞欧作にも墓地の絵ありますよ。あれは名作ですよ。

吉崎 だから今のひとね、描く場所に惚れ込んで描いてないんだと思う。

山本 私は何故一水会を選んだかという、中学の絵の先生が一水会の会員で、非常にいい先生だったんですね。当時、私はまあ十回出すと七、八回は落選して、そういうスタートを切って…かなり跳ね返っているんな絵を描いて挑戦しておったんですけど…、やっぱり落選が続くと、もう一水会やめようかな！と、そういう気持ちになりながら…

田島 藤島奨先生がね、「山本勇、あいつの絵は良いんだけど、手が上がらないんだよな」とってこぼしておられてね。随分褒めてみえたんですよ。

山本 その頃、近岡善次郎先生から一通の手紙が来ましてね、雲の上の先生から手紙が来たんでびつ

くり。その中身は、「君は非常にいい絵を描いている、入選落選に一喜一憂せずに、自分の絵を踏ん張って描きなさい」という手紙だったんですよ。



それで、本当に自分の絵をじっくり取り組んでいかなあかんなあと思いました。その手紙のおかげで今日があるというか…

今、落選を重ねてるような人達には出来るだけ声掛けしたり…近岡先生に恩返しは出来なかったけど「恩送り」という形で、手紙の一通でも出すようにしています。

田島 そういう事も大切だよな。(少し間があって…)

辰巳 それからね、中村琢二先生にお聞きした話で、安井曾太郎先生がいつも「変化」ということをおっしゃっていたそうです。自然の中の変化とか、いろいろ描く場合の時の注意でしょうね。

吉崎 モノを描いててね、まあ風景でも人物でも、輪郭の線が出てくるでしょ必然的に。安井先生、「変化、変化の一語につきる」っておっしゃったんです。で、今のひとはね、写真そのまんま描いてるから変化もクソもない。モノの説明はもういいよ！空気を描けよ、そこまでの空気、そこから向こうまでの空気。

田島 このごろ、大学でもあんまりデッサンやってないんだってね。**小川** 美大生見たってね、絵の具箱担いでないし。僕らの頃は絵の具箱背負ってカルトン抱えて、学校の帰りには必ずどつか描いて帰った。…道具も持たないでみんなどうやって絵の勉強してるんだろ。玉虫良次君とか山本耕造君は今の美大生だとか受験生教えているんだから、こういう座談会に出せばいいんだよ。「君たちは何を教えているんだ！」って。

さきや 伺いますとね、大学の石膏室にしているのは油画以外の学生だなんて言っていましたね。**吉崎** 入学したらもうデッサン終わりなんです。**山本** 中学の先生が、「筆を持つまでに絵を描きなさい」とおっしゃったんですね。で、私はやはり描こうとする自然の中で、風を、匂いを、そして光を感じ、そこに自分の身を置いて描いてゆく事が非常に大切なあと…**寺井** 僕なんか風景描くときは現場で必ず描いてくる。じゃないとね、現場の空気が分からない！**田島** インドを四十五年描いてるけど、行って匂いを嗅がないとね、思い出せない。僕は写真へらぼうに撮ります。それを白黒の拡大コピーにして構図を探ってからやる。自分の色にするまでエスキースやってね。写真との間に自分のエスキース、落書きやね、落書きをやったらいいいね。**寺井** 今の人は温めないんだな。**吉崎** あのねえ、田崎廣助さん、あの人がね、現場行ってフーラフラ歩くんだよ。すぐに描かないんだ。でね、その現場で歩いて空気を感じて、あっためて…それも四季、同じところに何回も行つて…あっためて描くんだな。心の中に熟したものを出すような…**田島** やっぱ写真のせいでしょうね。チャッチャと結論、すぐ絵に

この人に注目⑨
土田佳代子さん



今年、ただ一人委員に推挙された土田佳代子さんは石川県在住です。
〈聞き手〉加曾利光男

——一水会との出会いは？

近くの画材屋さんの紹介で、寅若繁先生の教室に入りました。習い始めて三、四年で一水会に出し始めました。確か44回展でした。同時に県展、北陸中日美術展や北國女流美術展などにも出品していました。

——構成的な画風ですが？

58回展で特別賞を頂きましたが、その頃までは写生がメインの静物画でした。その後、画面構成を主にする絵に変わっていききました。画面の分割が先で、大まかな構成が出来たら、描いたり拭き取つ

するでしょ。そのアイデアが無いもんだからね。

さきや とすると、描くという行為は、写真で一瞬には撮れないモノを、とにかく時間をかけて食いつがって描いていく…

小川 だからね、わぁキレイとか、わぁスゴイとかいって写真撮るでしょ。ところが、カメラはわぁスゴいなんて思わないんだ。わぁ、スゴイを描かなくちゃいけないんだ。

寺井 もう少し自由にさあ、だって写真だつてうんと幅広いんですからね写真みたいなやつから幻想的なやつまでね。顔が違うみたいになんぞそれぞれ考えていること違うはずなんだよね。

吉崎 安井先生が、房総だったと思うけど、水平線決めるのに半日かかった。消しちゃ後ろにさがり、消しちゃ後ろにさがり、水平線が決まらなかつた。

芸大で秀才だつていわれた皆吉志郎君、あの風景描きに行くとね、朝から描いててね夜お月様が出るまでね、真っ黒になるように描いてた。琢二先生がこのひとは何を描いてるんだらうって。そういう食いつき方、今の一水会の人じゃないな。

山本 私はいつも、酒造りと一緒に熟成の期間をどれだけ持つてい

るか、それを皆に尋ねるんです。この絵を描くにあたって、どんなに描くまえに考えたか、そこがものすごく大事になってくる…

吉崎 その辺が大事ですよ、技術なんて後からいくらでも上手くなれるもんだから、一水会の人には器用になりすぎている。

新井 川口で始まった実技講座のように、アトリエで人物描くと、露骨に描けなさが表れる。そこで、少しずつ実技を伴って教えて頂けると、分かり易いんじゃないでしょうか。

吉崎 ただね、そうやっていくとちよつと先生に似ちゃうところがあるんだよね、それを超えていけばいいんだけどさ。でも、そうやって実際見せるって必要があるね、今の人に。

田島 私、四日市でね、紙コップをモデルに鉛筆一本で質感や空間を描かせておるんやけどね。構図は浮世絵見ると、非常に面白い。もう一つ、俳句はなかなか構図の勉強になるよと勧めとる。十七文字の俳句…

絵というのは伝え方があるでしょ、音と音楽とが違うようにね。落ちないけれども賞にあらがない、それ何故かかっていうのを考えないと。

(少し時間をおいて…)

小川 僕、ちよつと腹たっているのは、日展出品者がね、日展に本命を出して、一水会のほうはサブの方出すという傾向がありやしないか？

吉崎 それさあ、僕、日展六十年以上出しているけど、昔は一水会で落つこちた絵を出しながら入選していた。



田島 健次 先生

田島 私はその件ではね、一九九二年の十一月三日ですよ、日展の二次会の際に高田先生が顔まっ赤にして怒られたことがある。一水会の入選者七十人を前に、何事やと、一水会よりも日展のほうに力入れとる、けしからんちゅうてね。

私は聞いてつてね、自分の事を言われているような気がしましてね。ほんで私、帰りの新幹線の中で、東海地区の日展懇話会からの退会届けを書いて藤島先生へ送りました。

新井 日展への退会届けですか？

田島 はい、九回出しとつて、その翌年からやめました。

小川 やつぱり、日展は日展、一水会は一水会だね。日展を主にして一水会のはまああものでやろうとか、そういう考えは止めてほしいね。

吉崎 僕は日展に出すのは他流試合だと思ってる。ただね、一水会で甘んじちゃつてね、落ちないからって同じような土俵の絵、描いてもらっては困る。

小川 そういう作品を出品するのはね、冷遇した方がいい。

辰巳 僕はもう日展やめたんですよ。自分から進んで。日展が上で一水会が下ちゆうことはないと思う。

吉崎 落ちるから出さなくなった人もいるんだよ。一遍や二遍落ちてさあ出さなくなるような絵描きやめろよと言いたい、俺は。

新井 日展系団体の中で、一水会は節度を持って日展とは距離を置いてるようにも感じられますけど…

辰巳 それは感じますよ。

たりしながら作つていきます。油絵具だけで描いていて、他の画材は使つていません。このところ苦手な色に挑戦してきました。まず茶色そして現在は青です。それ以前は白、ベージュを基調に描いていました。

昔は夜も描きましたけど、色味の関係で今は昼間の光だけで描いています。

——好きな画家は？

古今東西多くいますが、しつてい言えば宮崎進とかブラックの仕事が好きです。モノに即して精密に描写するタイプではないんです。

——地元での活動は？

約百人を擁する石川一水会では会計を担当しています。いくつかの絵画教室を受け持つていて、一水会に出品する生徒さんも八〜十人ほどいます。

十一月末に地元での個展を控えています。庭いじりや仲間たちとの写生旅行で気分転換しています。

………

独立独立、自分自身の創意工夫で絵画を追及する。そのありよう、清々しく感じられました。

ます。活用の方法などお考えをお聞かせください：



山本 勇先生

山本 石川県の、『現代美術展』(県展)、そこへ挑戦しとる人がかなりおるんですね。石川県の場合60号ですが、それを一水会の研究会に持ってきて、指導受けて県展に出す人がかなりいる。我々はそういう人達が一水会に挑戦する方向に持っていきたいなと今考えてます。

さきや 50、60号という、100号と比べてどうしても見劣りするの、これまで入選する数は非常に少なかつたんですが、出される方は案外多いんですね。

吉崎 いや50号まとめるといこうとは、それなりに難しい。観る方の人がもうちょっと50号の絵を拾いあげてくれないと…

小川 50号を重点的に並べる部屋を作ったっていいんじゃない。100号や130号のある部屋に50号入っていくとやっぱり、ちょっと損しちゃおうと思うんだ。

さきや 挑戦的な作品も出てきて

いるので、それらを集めて、新しい試みの部屋なんかあっても…

吉崎 ちょっと傾向の新しいやつをね、まとめてみてね。

小川 陳列も50号の人のが堂々と見られるようにね。

さきや 50、60号にもいい作品がありますので、先生方、是非評価して頂けたらと思います。最後に何か一言ずつお願いします。

田島 これから高齢者が多くなる！そのことを考えていかないとねえ。若い人が出たくなるような雰囲気も。私は「先生」という呼び方をなくす会にしてもいいかなあと時々思うんですね。やっぱり先生となると上下の関係でしょ。だからね、もっと自由に話しやすい雰囲気にするよう考えていかなう。

さきや 絵を描いているという点ではどなたも横並びですからね。

寺井 若い人が入りたくなるような会にしたいですね。

小川 他でも若い人はそんなに多くないんだよな。

吉崎 でもまあ、一水会って難しいですよ。技術もついてなきやダメだしね、ある程度年数がたつてからでないかね。

寺井 100号の画面は、とにかく相当努力が必要ですよね。

山本 私たちの周辺では、美術大

学を卒業して絵を中断している人がかなり多く存在していますね。ネットワークを使ってそういう人達と接点を持つていけば、若い人達が一人二人入ってくる。そこでひとつ層を作ればね、次の五年後、十年後には少し力をつけてくるのではということ話をしているんです。長年一水会を支えてこられた高齢者の方々、大作は無理という方々へのアクションをどうやっていくか皆で話し合いたいかなうと…

小川 50号でいいと。大きい絵描けないんだしたら50号でいいと。

辰巳 それとね、自然の中にある心というのかな？それが出ている作品を推すということも大事やと思うんです。自然の美しさとか、描くことの楽しさとかさういうものも大事やないかなと…

山本 今、バーチャルの世界で満足する。そういう時代の到来で、今の意見は大切ですよ。

さきや 今年から展示会場が一棟増えて、三十%ほどの壁面増があります。一水会は大いに可能性を頂いている反面、高齢化の問題や、若い人達に一水会の写実路線をどの程度価値あるものとして受け止めてもらえるのだろうかという危惧もあります。本日、先生方お小言の中にもそろって仰ったことは、



皆が出したくなるような魅力のある、元気のある会にしなければいけないんだということでした。初めて出品した人も、ベテランの人も絵が大好きという一方で、横つながらになりながら、是非とも自分の可能性を出していけたらいいなと思います。

今日は、お忙しい中、本当にありがとうございました。(二時間三十六分の収録から編集)

第5回 東京一水会

会期／2018年4月20日(金)～25日(水)
10時から18時半まで 最終日は16時まで
会場／O(オー)美術館(東京都品川区大崎駅)
オープニングパーティー／4月21日(土)

※お問い合わせは事務局まで：廣畑 正剛 ☎03-3324-0532

ご挨拶

弊社は、一水会図録制作に30年携わってまいりましたが、去る9月1日より下記のとおり新会社として業務を開始することとなりました。これもひとえに日頃よりの皆様方のご厚情とご支援の賜物と心より感謝申し上げます。このたびの新会社設立を機に皆様のご要望に誠心誠意お応えできるよう努力いたす所存です。何とぞなお一層のご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

 株式会社アールポイント東京
〒1040032 東京都中央区八丁堀4-4-3-4F
☎03-5542-0950 sales@rpoint-tokyo.co.jp

あのころこれから

鈴木益躬先生訪問インタビュー
聞き手／新井・さきや 撮影／加曾利

「千葉一水会展」は今年第3回です
ね。

僕は「地平線」という絵画研究会を
ずとやっていて、十八年くらいやっ
たときに千葉一水会を立ち上げよう
つて思いついていたのね。だけど人数
ちよつと少ないなあつて思つてたら、
千葉に住んでいる人たちが入会した
いと言つて結構増えてね、今三十
人くらいいますよね。2回展までは

船橋の市民ギャラリーでやつていたん
だけど広いところのほうが良いかな
あとつて今年の六月は千葉の県立
美術館でやることになりました。
規模が大きくなり変わつてきたこ
とはありますか？
みんな大きい絵を描くようになって
一水会展に出したいつて言う人も
増えてきた。
研究会として集まつて。



毎月やつて
るんです。
皆、小さな絵
描いていたん
ですけど今は
100号持つ
てくる。で、
その中で良い
絵を一水会に
出すわけ。一
水会に出した
絵か、出すた
めに描いてい
る習作を「地平
線の会に出す
ので、これは一
水会のための
勉強会になつ

たわけね。まだ一水会出すまでに行
かない人でも、啓蒙のために受け入
れてる。
―本展入選者も増え、茅野吉孝先
生を会長として益々発展していきま
すね。では、先生ご自身のことを伺
います。お生まれが東京浅草橋、お
父様が日本画家の安田鞞彦先生のお
弟子さんだったと。
父と安田先生、同じ小学校(有馬
小学校)でね。うちの祖父が日本橋
で酒樽問屋をやつていて景気が良か
つた。それで酒でも持つて頼みに行つ
たんじゃないかと思う。弟子にして
くれたね。
―お父様のお仕事はどのようなもの
でしたか？
父が大きな絵を描くの、しよつち
ゆう観ててね、絵つていうのは大き
く描くものだつて思つてたの。それを
真似て表でロウセキで大きな絵をか
いたのね。馬の上に兜かぶつた侍が
乗つている絵です。みんなから巧いと
か言われるとその気になつてね、色
なんか付けたりして何日か展覧会や
つてる訳よ、おもてでね。周りがみ
んな商店なので、「お前んちは何屋
だ？」つて訊かれるの。僕は分かん

いから「絵描き屋だ」つて言つ
たの。だから、絵描き屋のま
あちゃんつて言われてた。小
学校へ上がるころにはもう絵
描きだと思つてた、自分を。
小学三年の頃、伊勢神宮で国
威を発揚するための展覧会が
あつたのね。その時に学校か
ら代表で僕の絵が一枚だけ選
ばれた。そんなのはもう、絵
描きだから当たり前だと思つ
てた。軍国少年で勇ましい絵
を描いたと思うね。
―戦争末期、空襲の被害は…。
五年生の時に沼津へ疎開したんで
すが、アメリカの飛行機は富士山め
がけて東京へ入るので、必ず沼津の
上通るの。東京の帰りに余つた焼夷
弾を大量に落とすんだね。それでも
う焼け野原になつて埼玉県に再疎開
しました。埼玉に行つて終戦を迎え
ました。
―そして東京へ戻り日本橋高校へ二
年生に編入学。
父が日本橋高校の校長と知り合
いだったので、それで入つたの。日本
橋高校在学中に、ある時美術の先生
が、「夜間部に国画会の先生がいて
助手を求めているからお前行け」つて
言われて、それでその先生に石膏デ
ッサンを習つたり、夜間部の人の授
業は僕がほとんどやつて、石膏デッ
サン教えてました。

―すでに相当描けたということす
ね。
子供のときからずうつと絵を描き
続けているからね、みんなよりデッサ
ン力は少しあつたと思う。父が絶え
ず写生していたの観てるからね、も
う写生なんていうのは遊びなのね、
子供の時から。石膏初めて描いたけ
れど、ちよろいと思つた。で、描い
ているうちに段々面白くなつてきて
芸大を受けてみるつて言われた。と
ころが、デッサンを正式に勉強して
ないから受からなかつた。父が、「年
とつてるから、浪人はできない」つて
言つてその年にすぐ多摩美に入つ
ちやつたの。
―日本画は選ばれなかつた。
父は戦後はデザインをやつてたの
ね。東京へ戻つてすぐ「大日本文具」
(べんてい)つていう会社へ入つて、そ





「窓辺」 F30 1957年 第19回一水会展 プールプー賞

長が僕の親友で、彼が「俺の手伝いしろ」と言うので渉外係になつて、学生が公募展を観る時に安く入れるように交渉をしようと思つて全部の会を回つたんです。一水会は田崎廣助先生が事務局だった。それで田崎先生に「一水会の券を安くして下さい」と言に行つたら、許可してもらえたのね。それで「お前はどんな絵描いてるか見せろ」と言われて20号の絵を持って先生の家へ行つたら「必ずしも悪くない、出してみる」と言われて、一水会はその頃大体20号か30号で入れたんです。

このデザインをすべて父がやっていましたので、それで僕も多摩美でデザインをやるように言われたんだけど油絵料を受けて。

—それは油絵に魅力が？
—それは油絵に魅力が？

—それは油絵に魅力が？
—それは油絵に魅力が？

—それは油絵に魅力が？
—それは油絵に魅力が？

ありですか？
田崎先生のほかには木村辰彦先生。この先生がとてもお人柄が良く、絵も尊敬していたのね。お酒が好きで、展覧会の会場でよく酔つて歩いていらしたのです。それで何か僕は仲良くなったのね。それで木村先生が「酒呑もう」と言つて家に呼んで下さつたんです。

ね、みんな巻いてるでしょ、それを床に平らに延ばす。先生が観て、これは駄目だとか良いとか言われるんです。教わる人と先生だけが立つて、あとは正座している。僕は毎回怒られるの、先生に。解らないと訊くのね僕が。そうすると先生が最初のうちは「自分で考えろ」と言われたんだけどね、そのうち「やかましいっ！」と。先生がどうして怒るのかちよつと面白くなつたのね。例えばセザンヌは、風景画の中にキャンパスの余白の白がいっぱい残つてる。何年か経つとキャンパスが黄色くなるから絵が薄らぎちゃう、「あの白はこれで良いんですか？」と訊いたら「自分で考えろ！」と。言われた。でも怒つてから「そうだなあ、絵はこれじゃ駄目だよ」と言つた。それから毎回怒られるの承諾で行つてそれを僕はメモしたの。毎年十二回行くんだから、月に一回で。そうするともうノートにびっしり。これ宝物だった。だから今も解らなくなると先生が何て答えたか思い出している。薄い色で空を描く人がいたので「空の深さが出ないように思う」と言つたらね、「空は宇宙だから薄く塗つたんじゃないや宇宙の感じなかなか出せないよ」と。そういう

—先生方との記憶に残る出会いはお
—先生方との記憶に残る出会いはお

—先生方との記憶に残る出会いはお
—先生方との記憶に残る出会いはお



「廣稜会」田崎先生傘寿祝賀会 1979年2月18日 最前列左端が鈴木先生

—何年間くらい続いたのですか？
—何年間くらい続いたのですか？

—何年間くらい続いたのですか？
—何年間くらい続いたのですか？



浮田克躬さんと塩見栄一さんかな。「廣稜会」のまとめ役だからいっぱい世話になったんだ。

― 当時のお勤め先は？

教師を二十年やった。子供の世話が上手だったんで担任に何度もさせられて、今でもクラス会があるの。

先生になったのは二十四歳、多摩美出てすぐに父の意向で銀座で二年くらいデザイナーをやったのね。忙しいんで絵が描けないから、お昼休みにおもてへ行って二時間、お弁当を食べながら日本橋の建物を油絵で描いてたよ。すごい努力でしょ。でも田崎先生に「忙しくて絵が描けません」って言ったら「今年中に辞めろ！」って言われてね。その年に会社をやめた。それで田崎先生が「この者をよろしく」って書いた名刺をくれたの。

宛名が「東京都教育長殿」ってなってる。行ったら秘書官が、こういう勉強しろって教えてくれて試験受けに行つたけど、僕は服装がひどく派手でね、ダブルの背広着て黄色いネクタイで頭は油でピカピカ。「そんな格好じゃ先生になれない、受け直せ」って試験官に言われて、秋に学生服を着て行って受かったの。

それで先生になってね、美術の二時間授業は生徒と写生に行くの、毎回。何でもいから描いて来いって言つて。その頃はコーラがまだ珍しかったのね、巧い絵を描くと、「これは賞品だ。みんなに見つからないように飲め」って。コーラが飲みたいからみんな上手に描いて来るの。で、最高賞はラーメンをごちそうする。

― そりゃ凄い！ そこで十五年間教鞭を執られてそのあと五年間は？

十五年経つたら、上野の美術館が近いところが良いと思つて転任したの。台東中学。そこで先生やつた五年の間にどうやったら絵描きになれるか考えてね。家へ帰ると毎日夜九時から夜中一時か二時まで絵を描いた。慢性的な睡眠不足でくたびれていたけど、そうやって描いた絵が描き溜まつ

たの。田崎先生が「教師を辞めるのには個展をやれ」って言われて銀座の会場を予約して下さった。それで五年経つた年に初めての個展やりました。学校辞めるつもりで展覧会の準備してたのね。

― 画歴に「教員最後の年、学校を退職するに当たり画家として生きる決心」とあります。

台東中学へ移つた年の夏休み、何回か出ななきゃいけないのに学校には一日も出ないでヨーロッパへ一か月行つたの。校長先生に、「美術の先生が外国ぐらいい観なきゃだめだから」って言つてね。

― どちらに行かれたのですか？

イタリア、ギリシャ、ドイツ、オーストリーとフランス。描いてきた外国の絵と書き溜めた花と合わせて個展やったの。三十点ぐらいいあつたけど全部売れた。イタリアを描いた100号の絵も売れて急にお金持ちになつたので、四ヶ月ヨーロッパ旅行をした。

― ヨーロッパの風景を一水会展に出されたことはないのですか？

イタリアのフォロ・ロマーノを描いたのね。浮田さんに観てもらつたら「もつと厚く塗らなきゃ駄目」って言われて塗つて重たいような絵になつたけど、上野の旅館が買つてくれて今でも掛かつてる。浮田さんや田崎先生が一水会の偉い先生を大勢連れて初

日に来てくれたこともあつて売れたんだと思うんだけどね。

― その後は岬のテーマに移つて行きませんがその経緯をお教え下さい。

勤めていた学校のそば流れてる江戸川をずうと歩いていくと東京湾へ行く。房総半島へも行く。ちよちよ電車に乗つて、しまいに九十九里に着いて端から端まで全部歩いたの。舟も岬もあつて描いたんですが、もつと良いところないかなあと思つて段々北の方行つて、しまいに下北半島行つちやつたの。岬の上から見たら遠くに北海道が見える。あれもつと良いんじゃないかと思つて北海道へ。昔、写真で見えて気がいつちやつた室蘭に行つて、港を描いたら毎日バイクで通る人がいてね。そのうちに「今夜、町の文化人たちが飲み屋へ集まるから来ないか」って言われて連れて行つてくれたの。「ルネッサンスの会」っていう会があつてね、会長が室蘭市長。室蘭の新聞



「断層の岬」 F120 2014年 第76回一水会展

それから絵描きたちと小説家、そういう人たちが集まって呑んでる。話が盛り上がり、市長が「描いた絵を見せてみる」っていうので見せたら、「展覧会やってやる」って言うの。室蘭のNHKの大きなギヤラリーを全部貸してやるからって、タダなの。

新聞社の社長とも呑み友達になつて一週間やつてる間に毎日カラーで記事を新聞に載せてくれたり、NHKがテレビでも放送してくれたから会場に入り切れないくらい人が来て。― 題して『北海道の岬と自然』

もうこの時ははつきりと岬を意識してね。室蘭じゃないのも入つてるんです、これは能登半島、これは斜

里、それは小樽。

― 先生は「岬」に関して、「地終わり、海始まる、地形の緊張感」と書いておられますが…

簡単に言うとな、岬っていうのは地面のおしまひっていうか始まりでしょ、海はその接点で、その異質な



のこの接点に緊張感があってね、それが描きたくて描いてるのね。
 —「マイナス十五度の浜で雪に縦穴を掘って顔だけ出して描いた」。
 そうそう、寒くていられないんです。

—水彩絵の具なんか凍って使えないでしょうね。

でもね、使えます。熱湯の中に塩を入れてみたりね、日本酒を入れてみたり、ウイスキーたらししてみたりしたの。お酒入れると凍りにくいですよ、ところが旅館に帰ってきたりしてると溶けて酒臭い。だから初期の北海道の絵はみんなお酒が混ざってるね。

—「その地に住む人々に思いをいたし作品を創っている。芸術とは自然の体温の記録と書いている」とお書

きになっています。

そうそう、これでいいんじゃないんですかね。

—土地としては寒くても人には熱気、温もりがありますね。

北海道の人、すごい親切。今ね乙部の副町長と大仲良しなの。副町長さんが第1回の千葉一水会展の時に祝いで来てくれたの、乙部から。それで去年「地平線の仲間を七〇八人連れて行つたらすごい大歓迎で函館までバスで迎えに来てくれたの。ご馳走にもなってる……」。

—室蘭での個展の翌年、二〇〇二年から五年間は吉崎先生から引き継がれて一水会事務所をなさる。

吉崎先生は、ご高齢のお母さんやずつと来てられてもう寝る時間も無いような状態だったんですよ。このままだったら吉崎さん病気になるんじゃないかと思ったから僕が代わらせてもらった。

—鈴木先生の時代に東京オリジナルカラーシールセンターとの繋がりが出来ましたね。

カラーシールセンターにはね、パソコンを教わった。家まで来てくれるんですね。一水会のことをまずやってね、ついでにパソコンを教わったんです。

—坪井正和社長から直に？

そう、うちへしよつちゆう来て。終わってから呑むのが楽しみで、う

ちで十二時まで呑んでね、あの人がたぶんその日のうちに家に着かなかったと思う。ずいぶん一緒に呑んだなあ。

—その時代に大体データベースが出来たと思います。

吉崎先生の頃にはほぼ出来た。でもね、ぱつと画歴を出せるようにつて言うのですね、坪井さんがやってくれてね。

—新鋭展(現・精鋭展)が銀座へ移ったのも鈴木先生のころでしたね。

上野で「九月会」っていう展覧会があつてお客さんがろくに来ない。

「あそこやつても意味がないから銀座へ持つていこうよ」つて齊藤恵子さんに相談してね。齊藤さんたちが凄く熱心に探して、あの美術館(東京銀座画廊美術館)との契約に漕ぎ着けてくれて、僕が正式に頼みに行つた。で、お金が上野より高くなるけどやるか?つていうアンケートをとつた。全員にね。運営委員会にも諮つた。みんなで銀座に出たらどうかつていうようなことを働きかけてね。

最初小さい部屋だったけど、一水会が会場費負担を増額してくれて、だんだん人数も増えて今の会の元が出来た。だから今の精鋭展は齊藤恵子さんたちのお陰です。

—事務局担当の五年目に先生は体調を崩されましたが、その後お元気になられましたね。

「多摩美芸の会長とダブつたの。もう自分の絵を描く暇がないので多摩美芸を辞めた。それでも五年目には参つちやつて辞めたんだよね。僕の時はおんとうに一人だね、会計は小泉元生さんで、小泉さんは会計、経理は明るいよね。

偉い先生方の会に出ると、みんな超偉い人で、今みたいに穏やかじゃないかね、何か言うとか喧嘩

ごして話してたね。命がけの絵描きの話し合いなの。だからその中で強引だとみんなから嫌われたり。だけど会のために言ってるんだからね。高田誠先生は話が穏やかで、事務局やつたけど奥さんがもの凄く有能で。田崎先生も奥さんがやつたから、事務局つていうのは一水会の歴史の中ではほとんど奥さんがやつた。うちでも同じですよ、家内がいないと出来なかつた。

一番相談に乗ってもらつたのは菱田義宣さん。文章の書き方も、彼は自分のパソコンに入っている文章をくれるのね。

—本当に五年間お疲れさまでした。ところで最近の一水会展に何か感想をお持ちですか?

去年(78回展)はちよつと特別で



「晩秋」 F130 1998年 第60回記念一水会展

ね、この作品は無理じゃないかというのが入つてたね。今年は50号も例年以上取るから下手でも反省して、もうちよつと良くなるかもしれないし、試しに様子見て入れたつていうことだと思つけど、ちよつとそこが気になつたな。

—今年から四棟になりますから色々な出来ることはあると思います。

たくさん入選すると会が大きくなつて良いんだけど、質が落ちないように気を付けなきゃいけないと思ふのね。去年少し質が落ちたから例えば初入选の部屋を作る。初入选から育てる場所。初入选でこれから何とか育てますから大目に見て下さいつていう部屋を作つたらどうかと思ふ。ほかの団体展にも幾つかあるけどね。育てると何年か後にその中

の何人かは巧くなるから、少し悪くても取つていいと思う。
 初入选した人たちに伝える、教えていくというふうなことは…。



「鵜匠」 鈴木彌一郎(香冷) 屏風絵 1935年頃

数え年だと八十五になるのね、それでもうやりたいようにやろうと思つてね、多少おかしくても空想をいっぱい混ぜた、空に小鳥が飛んでる

その絵も鳥のところに残像が描いてあるんだけどあれは空想の鳥なのね。観ただけじゃなくて空想を混ぜた、ただの写実じゃないようなものをやつて行こうかと思つてるのね。一水会ではあまりないけど、よその会へ行くとき何かが飛んでくるのはいくらでもあるのね。一水会もモチーフの種類がもうちよつとあつてもいいんじゃないかなあ。人物画は似たような画が多いし、風景も一生かかって描くほど頑張つたようには見えない風景が多いのね。そうでなくてね、「あつ！」と言つような、今までにないようなものを創造する方向もあつていいんじゃないかと思つてますね。だから自分でやつてみようかと。

—是非！
 うちの娘、多摩美の油絵科なの。卒業制作の絵、猫が100号に描いてある、一匹。で、全然写実じゃない。普段描く絵も月夜の晩に竹箒に魔女が乗つて飛んでるの。うちの娘はもう全然気楽にやつてる。それ

そういう人たちの面倒を見ればいいわけよ。例えば今の教室(旧芝園中一水会アトリ)もあるじゃない、ああいうところへ勉強会に来なさい、「来てもいいよ」じゃなくて「来なさい」。どうしたら巧くなるのか解らないはずだから面倒見る受け皿を作る。研究会をね。上手な人のデッサン会もいいけど「力不足の人来なさい。このままだと落ちますよ」つて言つていいんじゃないかと思うの。
 —良いご提案です。では鈴木先生ご自身の創作について、これからのことと抱負などお聞かせ下さい。

見ると羨ましい。僕なんか描いてる時にこんな描くとか言われるんじゃないかと思つたりする。うちの父が描いた絵もここに。スケッチなんかはもう膨大な量があるんだけど、これは安田叔彦先生に教わつてるころの絵だと思つ。「香冷」つていう雅号。二つ折りの屏風、何枚もあつただけだね。200号くらいの絵を全部で五枚描いたんだけど一枚は宮内庁、もうひとつは千代田区の博物館。それから国会図書館かなあ、何かそういう所にあるの。割合と写実的な絵だよ。僕がモデルになつた絵も結構あつて、加藤清正の少年時代、それを描いた絵もある。



田崎廣助先生とともに「廣稜会」宴席にて 1975年頃

—すがたかたちは変わつても「絵」こそは三代に渡り受け継がれてゆく…素敵なことですね。今日は貴重なお話を賜り、有難うございました。ねえ、喉乾いたから向こうでビール飲もうよ。
 以上「あのころこれから」
 二〇一七年一月二十二日
 千葉原船橋市西習志野
 鈴木益躬先生アトリにて

第15回 一水会精鋭展 会期:2018年3月12日(月)~18日(日) 会場:メルサ7階 東京銀座画廊・美術館 ※優秀作品には賞を贈る

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------|--------------|----------------------|-----------------|--------------------|-------------------|---------------------|---------------|----------------------|-----------------------|---------------------------|--------------------------|-----------------------|--------------------|---------------|
| 青木伊藤岡山久世小松相馬戸部服部間瀬山本 | 年尚豊夢正順武宏則子徹佳 | 朝倉井上小沼久保五味滝沢外山畠山松澤弓手 | 一茂秀夫直樹至順子正枝泉次研平 | 浅野井上鍵久保斎藤田中澤浜崎三宅渡邊 | 和喜日出恭博孝美子実子文千尋柳道男 | 安達今城加瀬久保才村玉上長坂日向野宮崎 | 久俊雅春慶議啓佑千恵淳貴至 | 雨宮岩木加曾久保芝田村中島平井宮島百合子 | 嘉吉秀雄利光男多貞夫教純公男和長芳夫百合子 | 新井隆美奈子美智子弥生真知子良隆哲泰明人三輪由紀子 | 池田賢子文子恒徳高光神宮紀勢子佳代子裕二範恵美子 | 池田竜太郎悦子春美真澄佳代義夫一昭加奈子保 | 市川小笠原木村後藤鈴木寺岡西保坂山下 | 広美毅夫邦喜博三真里晶審也 |
|----------------------|--------------|----------------------|-----------------|--------------------|-------------------|---------------------|---------------|----------------------|-----------------------|---------------------------|--------------------------|-----------------------|--------------------|---------------|

第57回 一水会選抜展 会期:2018年3月14日(水)~20日(火) 会場:日本橋三越本店 本館6階・美術特選画廊

- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|-----------------|-------------------|------------------|------------------|-----------------|-----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-------------|-----------|-----------------------|--------|
| 小川久保小泉一の遠藤河西河石城 | 游田辰男元生洋博昭治正義真知子 | 寺井力初雄耕造企明久信公子真澄明人 | 吉崎佐藤廣畑平井荒時相馬小山松澤 | 道治道雄正剛利明邦弘順子英一泉次 | 田中篠原山田弓手茅野西鈴木宮崎 | 義昭登正博研平吉孝真里喜博貴至 | 越智山名斎藤宇野中澤森田岡 | 節將蕙子のり嘉文敬介敏雄正勝 | 浅見田島池内竹内岡野斎藤山本 | 嘉正健次清明徹信子美恵子佳子 | 辰巳玉虫浅見上原新井滝沢須貝 | 文一良次文紀文丸隆美恵子昌春 | 鈴木丹笠井重石村上海部 | 益躬一章隆良晃選洋 | さきやあきら山本稲原鍵主勝谷伊藤金井美智子 | 勇吉夫明尚尋 |
|-----------------|-----------------|-------------------|------------------|------------------|-----------------|-----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-------------|-----------|-----------------------|--------|

一水会事務局だより



第79回一水会展は盛況のうちを終了しました。初入選が六十三点と大幅に増え展示総数も七五六点となりました。初出品・初入選が増えることは新しい風が入り、会全体がより元気に、活性化することに繋がります。入場者総数は昨年よりさらに増え一九、七一六人の観客を迎えることができました。一水会が親しみやすい作品の多い会であることの証かもしれません。図録は大きさや様式だけでなく、お渡し方法も変わりました。重さも軽くなりましたので、大変でも一冊お持ち帰りいただき、懇親会場などで出品者同士の作品について話題になればとも考えています。また、どなたかへのプレゼントとして引換券をご活用していただければと思います。まだまだ検討する点がありますが、引き続き改善を進めてまい

りますので、何卒ご協力お願いいたします。

さて、来年は第80回記念展になりますので、特別な企画を検討中です。近年、応募作品の表現の幅がやや狭くなりつつあるように感じます。そこで、今までの一水会をつくり上げてきた作家達のしごとの幅広さを是非知っていたらどうという趣旨の企画です。来年度は会場の一部を企画室にする予定です。今年度より入選点数が少なく厳しい審査になり、上段に展示する作品がやや増えることも予想されます。是非とも皆様の力作で、よりエネルギーのある



会場にしていきたくと思います。何卒、ご理解下さるようお願いいたします。

(玉虫良次記)

最近の動静

【死去】外処(旭(委員)、榎本秀利(委員)、宮腰精梧(会員)、竹村文男(会員)、高橋力平(会友)、謹んでご冥福をお祈りいたします。
【退任】中村美繁子(会員)、堀田祥子(会友)

日展審査を終えて

今回で日展の審査は四回目ですが、この改組新日展では、色々な事が厳しく変わっていると感じました。今年から洋画の室も減らされて、百名ほど入選数が減ります。一水会からの日展への応募数は、だんだんと減っていると感じました。応募する方は、早く制作して七月初旬にある程度作品をまとめてほしいと思います。七月初旬の研究会は重要です。これから力作を描くであろう方、ベテランの方が何人か入選できなかった事が、悔やまれます。日展の

2018年の展覧会スケジュール

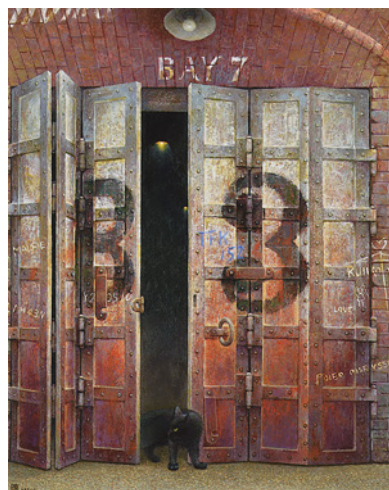
- 第57回選抜展
三月十四日～二十日
於/日本橋三越本店
運営委員・常任委員と選抜された委員、会員、会友、一般出品者が出品。
■第15回一水会精鋭展
三月十二日～十八日
於/メルサセ階
東京銀座画廊・美術館
- 「第79回一水会展」にて84名選出。40号、50号の作品。
■盛岡展
三月下旬～四月上旬予定
於/深沢紅子野の花美術館
- 第80回記念一水会展
九月二十日～十月五日
於/東京都美術館



審査員は、一年ごとに総入れ替えです。気持ちを新たに頑張ってください。

今回特選は二度目の受賞で、鍵主恭夫先生です。倉庫からゆつくりと頭を出したクロネ

コ、その一瞬のかすかな音、繊細で重厚な作品だと思いました。私は秋に体調を崩していた



音 鍵主 恭夫

のですが、今年は今のところ大丈夫のようです。新審査員の久保博孝先生と二人で出来たので大分助かりました。私は日展でも一水会でも展覧会が始まった時点で、次の年の制作を始めます。次こそは、これよりましな作品を描こうと思えます。(田辺知治記)

編集後記

80回展を前に、何となく落ち着かない。記念展が近づいて、ここは広報部も何かお役に立てないものかと部員一同心急いでいるのかもしれない。運営委員会でもう、企画の準備も始まった。そんな中、広報部はこの秋から部員が一名増えた。これまでの四名の部員もパソコン使用はソコソコ腕に覚えのある面々だったのだが、紙面のデザインなど機関紙のイメージづくりには毎回四苦八苦してきた。そこにニューフェイス、広島の木村毅さんが加わった。木村さんは絵もすごいがパソコン技術も頼りになる。初仕事は前号、久保田先生の個展記事。今号でも、巻頭言と白の会の記事デザインを手がけている。先日、白の会の記事見本をご覧になった小川先生の曰く、「とてもきれいに出来ているね、これは愉しみだ。木村さんはいいい人だねえ」ほんとうにいい人が入ってくれた。…と、拙文をみて木村さんの曰く、「ねえ、そんなにプレッシャーかけないでよ！」

(A・S)